

第2章 本研究の目的 及び 限界

第1節 本研究の目的

本研究の目的は、『アイデンティティ再体制化の観点から、引退後の適応に寄与する要因を同定し、競技引退に関連したプロセスを解明し、そして、競技引退体験がその後の人生においてどのような影響をもたらすのかを検討すること』にある。そして、この目的を達成していくために、以下に示すような検討課題を設定する必要があると考えられた。また、図 2-1 の左側には本研究で捉える課題を、右側にはこれらの課題に対応する具体的なアプローチをそれぞれ提示した。本研究は、このような流れに則って構成されている。また、5つの検討課題を以下に示した。

【検討課題1】 競技引退に伴うアイデンティティ再体制化を捉える意義を検討すること。ここでは、競技引退を課題とした先行研究を概観し、その特徴と理論的限界を指摘することから、本研究で捉えるべき研究課題を明らかにする。そして、その研究課題を究明していくためには、「アイデンティティ再体制化」が有効な視点となることを確認する（第1章）。

【検討課題2】 競技引退に関連して生起する問題を把握すること。競技引退に関連してアスリートが直面している問題を明らかにすることは、この種の問題に対して解決すべき課題を明白にすることになる。ここでは、プロサッカー選手のキャリア移行（引退と移籍を含む）に注目し、アスリートが引退に関連して直面する問題を明らかにする（第3章）。

【検討課題3】 引退後の再適応様態を把握すること。引退後の再適応様態をアイデンティティ再体制化の観点から把握することは、これに影響を与える要因を抽出することを可能にする。ここで、「引退の捉え方」と「引退後の取り組み」から類型化し、引退後の適応に影響する要因か

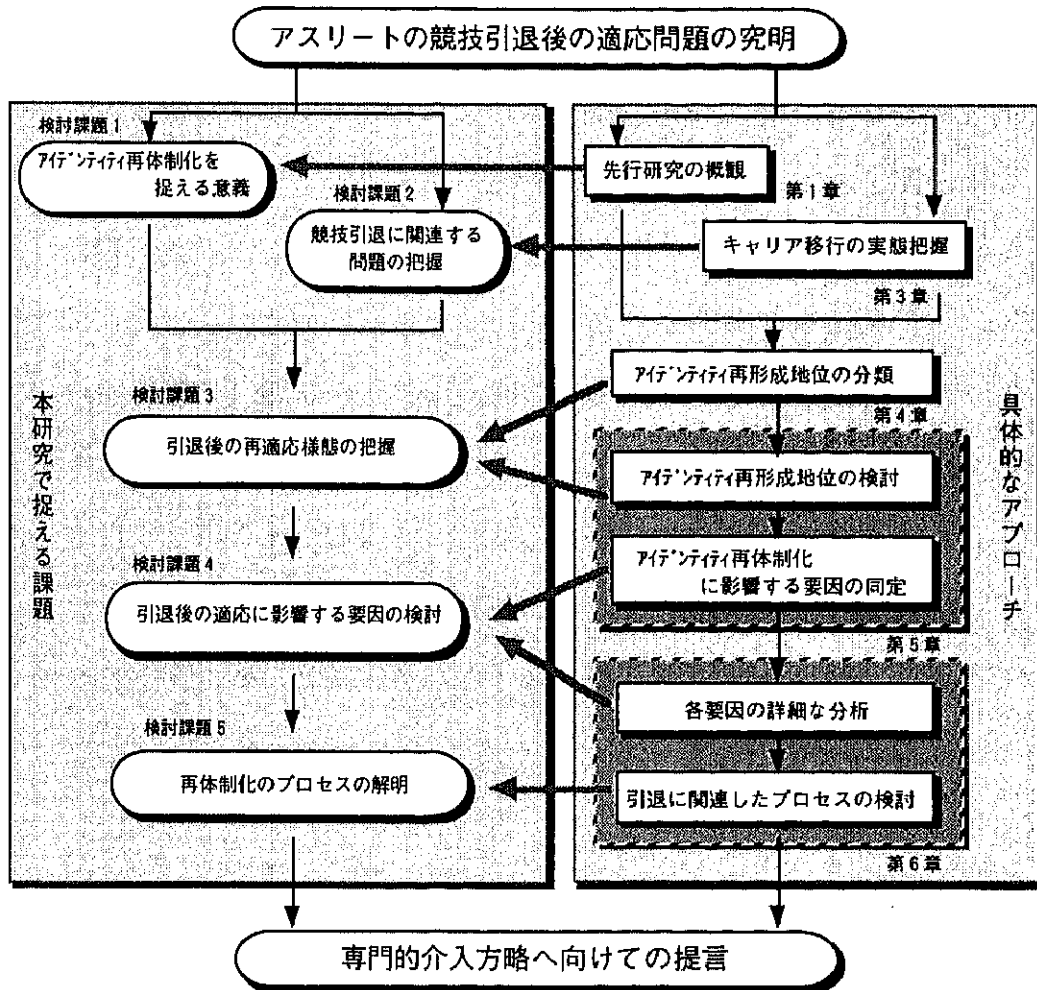


図 2-1：本研究のフローチャート

ら各タイプの特徴を明らかにすることによって、現状における満足感のみならず、過去の出来事との関わりの中で引退後の生活にどのように取り組んでいるのかといった時間軸の中で引退後の適応を捉えることができる（第4章・第5章）。

【検討課題4】引退後の適応に影響する要因を検討すること。特に、引退後の適応に寄与する要因について詳細に検討することは、具体的な専門的援助を考案する上で有益な資料となる。また、これを明らかにすることは、競技引退体験がその後の生活にどのように影響するのかを検討することにもつながると考えられる（第5章・第6章）。

【検討課題5】競技引退に伴うアイデンティティ再体制化のプロセスを解明すること。「アスリートである自分」から「アスリートではない新たな自分」への組み換えをどのように行っていったのかを明らかにすることによって、アスリートの引退に伴うアイデンティティ再体制化のプロセスを明らかにすることができる（第6章）。

第2節 本研究の限界

競技引退後の適応問題にアプローチするとき、いくつかの理論的枠組みや研究方法を利用することができるが、本論はアイデンティティ再体制化 (identity reconfirmation) の観点からのアプローチに絞られている。

また、本研究は、引退後、数年経過した元アスリートを対象としており、既に体験した競技引退への彼ら自身の振り返りを基に、引退後の適応問題にアプローチしている。ここでは、ライフサイクルを想定した問題の捉え方が有効であるとされた。しかし、調査対象となった彼ら自身もまだ人生行路の最中にあり、今後、大きな発達的変容を遂げる可能性も充分想定される。このような個人の長いライフスパンを考慮すると、本調査の枠組みでは、個人の発達や成熟の途中を捉えていることになる。

そして、この種の問題を取り扱う研究の最終目標が、専門的援助へ向けて有効な提言を行うことにあることについては、これまでも繰り返し述べてきた。しかしながら、本論では、その提言が妥当であるか否かの確かめを行うまでには至っていない。具体的な専門的援助を実施し、その効果を検討することも大切な課題であるが、本研究においてはそれを今後の課題として残してしまっている。

第3節 本研究で使用する用語の説明

以下では、本論文で使用する用語を定義づけし、説明する。

(1)競技引退 (athletic retirement)

アスリートがアスリートではなくなる現象。いわゆる現役引退を指し、「スポーツ競技への活発な参与から、他の活動へ移行するプロセス」を意味する。そこでは、これまで傾倒してきたスポーツとの関わり方に何らかの転換を求められる。

(2)アスリート (athlete)

スポーツ関与の仕方には、いくつかのランクづけが可能となる。Lesyk (1998) によると、①不規則にスポーツに従事し、記録や成績等に関心を持たない者を「不定期なスポーツ参加者 (casual participant)」, ②定期的にスポーツを行う楽しみを重視する「レクリエーション的アスリート (recreational athlete)」, ③パフォーマンス向上に高く動機づけられたレクリエーション的アスリートを「真剣なレクリエーション的アスリート (serious recreational athlete)」, ④スポーツに価値体系の多くを依存している「献身的なアスリート (committed athlete)」, ⑤成功をおさめた献身的なアスリートを「優れたアスリート (elite athlete)」, という5つのカテゴリーの分類が可能であるとしている。この分類に従うならば、本研究では⑤を中心として研究対象を選定している。

(3)アイデンティティ (identity)

エリクソン (Erikson, E.H.) の使用した用語. 「一貫した自分の感覚」と「自分が他者と異なる自覚」から構成され, 青年期にこれを統合していくことが「アイデンティティ形成」とされる. これは一生涯を通じての課題であり, 本研究の基本的立場に大きく関与している.

(4)アイデンティティ再体制化 (identity reconfirmation)

岡本 (1985) が, 中年期の心理社会的発達課題として提唱した用語で, 「新たな自分づくり」を意味する. 人は一生涯を通じて発達・成長していくものであり, 多くの心理社会的変化の体験 (危機: crisis) を契機に, 自己編成を繰り返していく. 特に, 中年期に直面する発達の危機には, それまで自己を支えていたアイデンティティを一旦解体し, 吟味し, 再編成していくことが求められており, そのプロセスは, 青年期のアイデンティティ確立のプロセスによく似た特質を有していることが指摘されている (岡本, 1994). アスリートの競技引退に伴う心理社会的発達課題もこれに類似しており, こうした背景から「アイデンティティ再体制化」という用語を用いた.

(5)適応 (adjustment)

発達を考える際に, この概念は重要な役割を果たす. ある環境から別の環境に移っていくことが, 発達の一側面であるが, この時人は, 新しい環境に「慣れよう」とする. この適応にうまく対処できる者もいれば, そうでない者もある. また, ある時期に適応がうまくいったように見えても, その後の人生で不適応に陥り, 深刻な問題を抱えることさえある. つまり, 人の適応には完成などなく, 大なり小なり部分的には適応がなされていないことの方が多いのではないだろうか. そう考えると, 適応

とは、ある環境が要求することに人が応じることだけでなく、部分的な不適応もあれば人が環境へ働きかける場合もあるといえる。本研究では、後者の能動的な適応のあり方を重視している。

(6)発達課題 (developmental tasks)

ハヴィガースト (Havibhurst, R. J., 1972) は、人間のそれぞれの発達段階には直面すべき課題があるとした。本来人間は一生涯を通じて発達し、完成されることはないという。そして、人は生涯を通じて社会・文化の中で生きる存在であり、社会・文化は各発達段階に応じて様々な課題を要求している。また、ある時期に要求される課題は、次の時期に要求される課題への対処の温床となる (ハヴィガースト, 1997)。

(7)ライフ イベント (life-event)

人が一生のうちで共通して通過する移行期の事柄や出来事を指す。

(8)危機 (crisis)

ここでは、否定的な意味としてではなく、多くの場合は、避けることができない、乗り越えていくべき、差し迫った発達上の課題と捉える。ある時期から別の時期に移行する際には、とりわけ様々な変化を体験することになる。この時期には、大なり小なり様々なストレスに対処しなければならなくなる。こうした状況を危機と呼び、これを個人が成長していく好機 (チャンス) と捉えている。つまり、様々な難局に対して、個人が自分を取り巻く環境に対して能動的な働きかけを行い、克服していくことで、更なる人格発達を成し遂げていくのである。

(9)生活構造 (life-structure)

レヴィンソン (Levinson, D.J.) が使用した用語で、「人生のある時期におけるその人の生活の基本的パターンないし設計」を意味する。人生におけるいくつかの移行期（過渡期）には、この生活構造に変化を来す。つまり、ある時期の生活スタイルの中で安定的な生活を送っていたのが、別の時期に移行すると、その状態から脱却して、新たな生活スタイルを構築していくことになる。

(10)時間的展望 (time perspective)

レヴィン (1979) によると、「ある一定時期における個人の心理学的過去及び未来についての見解の総体」とされる。広義には、個人の現在の事態や行動を過去や未来の事象と結びつけたり、意味づけたりする意識的な働きで、一般的には、人生にかかわるような長期的な時間的広がりのある場合をいう。また、いわゆる「見通し」を指す。

(11)社会化予期 (anticipatory socialization)

個人の社会化に向けて今自分が置かれている状況・状態に気づくこと。競技引退の場合、「これ以上競技を継続するわけにはいかないことに気づくこと」を意味する。ちなみに、「社会化」とは、個人が他の人々との関わり合いをとおして、社会的に適切な行動及び経験パターンを発達させる全過程を示す広範な意味を有している。

(12)アスリートとしてのアイデンティティ (athletic identity)

スポーツ場面を手がかりとして形成されるアイデンティティを意味する。アスリート個人の価値体系や生活パターンは全てこの感覚に依存し、

競技生活は送られているといえる。

(13) キャリア (career)

「経歴」や「仕事」を意味し、人間の生き方の表現とされ、そこには個人のアイデンティティが反映され、いわゆる「やり甲斐」や「生き甲斐」が含まれることが望ましいとされる (シャイン, 1978)。

(14) 競技期 (a period of competition)

アスリートが競技に傾倒している、その期間を意味する。

(15) 引退期 (a period of athletic retirement)

アスリートにとって引退のきっかけとなる出来事に遭遇し、その後、実際に引退していく、その期間を意味する。

(16) 再適応期 (a period of readjustment)

アスリートが引退後を迎え、その後新しい生活に取り組んでいる、その時期を意味する。